

私 の 工 夫

「できる」自信につなげる
授業づくり

県立岡山南高等学校

教諭 大橋 陽子



1 はじめに

平成元年、定時制高校に赴任して以来、30年目を迎えた。様々な失敗を重ねつつ今に至るが、家庭に関する専門高校に長年勤務させていただいた中で培った教科（特に被服の製作）指導の工夫を紹介したい。

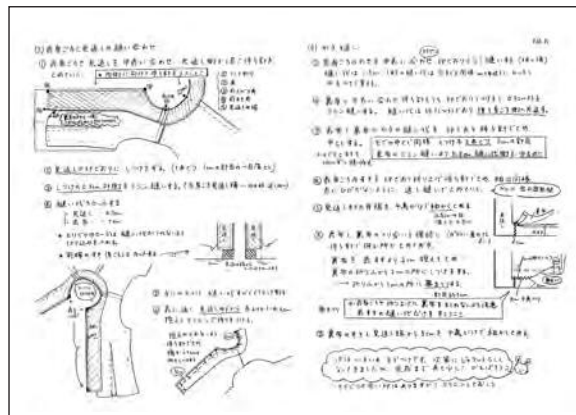
りをする生徒はほぼ皆無で、入学当初は針を持つ手が震え、ミシンの操作方法も知らない状態である。

(2) 指導の工夫

① 授業前の準備

段取り良く授業を進めるために大切なのは、授業前の教師の準備である。生徒が実習室に入るとすぐに準備できるように、毎時間の目標と要点、各自準備することを板書しておく。また、製作する作品に応じて、完成作品や段階見本を見せながら指導できるように、見本づくりは必須だと感じる。見本を作ると、難しい作業やポイントが明確になり、きちんと説明できる。さらに、教科書には載っていない美しく仕上げるためのコツを図示した製作用プリントも作成する。

作成した見本やプリントは準備室や職員室に置き、教員誰もが活用できるように、効率化を図っている。



手書きプリント

② 学び合い

実習では、向かい合う生徒同士が声を掛け合い連携しながら製作を進められるよう工夫している。

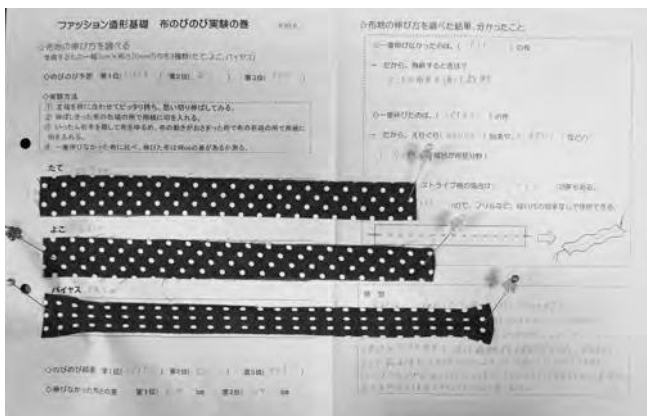
一つの作品が完成したら席替えをし、いろいろな人と協力することがクラスづくりにも役立つ。

③ 明確な作業目的と理由

作業の説明をする際は、必ず目的と理由を理解させるようにしている。例えば「アイロンをあてる」

という作業にも、「しわを伸ばす」「出来上がり線で折る」「縫い代を割る」「接着芯を貼る」等、作業の目的によってアイロンの使い方が違うし、さらに、水をつけたり仕上げ馬やプレスボールなどの道具を用いたりしながら、より美しく仕上がるように指導する。また、授業のはじめに必ず復習タイムをとり、前時に実施した作業内容のポイントを確認させる。

同じ幅・長さに切った縦・横・バイアスの布を伸ばして布の伸び



布のびのび実験プリント

2 実践

(1) 生徒の実態について

本校は商業と家庭に関する専門高校で、家庭学科は各学年「生活創造科」2クラス、「服飾デザイン科」1クラスからなる。新入生にアンケートをとってみると、日常生活で針や糸を使ってもものづく

方を比較する実験では、布目を通して裁断する理由やバイアス布の特性を生かした使用法を理解させるのに大変有効であった。

④心を込めた作品作り

「『まあいいか、1ミ³位』と、いい加減なことを前後左右で5回繰り返すと2ミ³もずれてしまい、『どうでもいい服』になるよ。作品は自分自身です。」と、一つ一つの細かい作業にも心を込めることで仕上がりが美しくなることを伝えている。これは作品製作に限らず、ノートや課題に取り組む姿勢も同様と考えている。

⑤ICT機器の活用

現在本校では各HRと多くの特別教室に接写型のプロジェクタが設置され、実物投影機やパソコン等とつなぎ、魅力的な授業展開がなされている。私が特に有効と感じているのはデジタルペンを使用した「製図」の指導である。細かい部分を拡大し、ポインタでマークすることで、理解しやすく、ミスが減り、「製図は楽しい」と言う生徒が増えた。



ICT機器利用授業

⑥技術検定の指導

家庭科技術検定の指導では高得点での合格を目指させる。毎年改訂される問題集の変更箇所をまとめたプリントを作成し、教員・生徒に配布、筆記試験の出題傾向を分析する。実技指導では時間を計りながら「速く正しく美しく」をモットーに、本番を見据えた指導をする。H28年度は86・7%、H29年度は85・7%の生徒が技術顕彰を受けることができた。

⑦作品の評価

一枚の布が作品となり、完成した時の感激は何物にも代えがたい

ものである。授業で仕上げた作品は、必ず家に持ち帰って家族にコメントを書いてもらい、作品評価表として提出させる。一人一人の着装写真とクラスの集合写真を撮り、作品評価表の裏面に貼って返却するようにしている。

宿題として応用作品を製作させた際は、作品発表会を開催し、相互評価をさせる。皆からの「かわいい！」「すごい！」の言葉に自信がつくと同時に、皆の頑張りに「次はもっと頑張ろう」という刺



ブラウス着装写真

激を受ける何よりの企画である。

3 おわりに

入学当初はおぼつかない手つき
の生徒たちが3年生では三冠王（家庭科技術検定一級三種目合格者）

となったり、自分たちがデザインし製作した衣装を着てファッションショーの舞台上に立ったりと、眩いばかりの成長を遂げる。素直で前向きな生徒たちと、背後にある家族の支えと励ましがあってこそ、この成長がある。また、本校では実習を伴う授業を二人体制で担当することに加え、エキスパートとして勤務してくださっている洋裁士の先生に御指導いただけるという恵まれた環境での教員間の連携が、生徒の成長につながっていくと確信している。今後も様々な場面で情報交換をしつつ、よりよい指導方法を模索していきたい。

教員採用数が少ない現状の下、専門教科の技術指導や後進の育成が、今後の切実な課題である。